

いかにして仏弟子を仏説の正しい理解に導くか —バーヴィヴェーカの「教育的」推論—

田村 昌己(広島大学)

【発表要旨】

仏が直観して覚ったところの真実はそれ自体言葉を越えたものである。しかしながら、仏は、そのことを十分に自覚した上で、言葉に依って真実を弟子たちに説示した。仏の言葉(アーガマ)は仏教徒にとって権威(pramāṇa)であるが、その一方で多様な解釈がなされる余地を持つ。仏教徒の間で同じアーガマを認めているながらもその解釈が異なる場合、何によって誤った解釈を否定し、正しい解釈を導くことができるのか。

中観派の学匠バーヴィヴェーカ(Bhāviveka, ca. 490–570)によれば、それはアーガマに従う(āgamānuvidhāyin)推論(anumāna)による。真実はそれ自体言葉を越えたものであり、推論の対象領域ではない。この推論が果たす役割はアーガマの誤った解釈即ち真実に関する誤った概念的理解を否定することである。この推論を通じて結果的にアーガマの正しい解釈即ち真実に関する正しい概念的理解が得られる。その後、概念的に捉えられた真実を観じ、修習を重ねることによって、最終的に概念を離れた真実があるがままに直観される。

バーヴィヴェーカによれば、アーガマを正しく理解する者を除けば、アーガマに対する態度の違いにより仏弟子は次の三種に分類される。すなわち、自派のアーガマに対して疑念を抱く者、誤った理解をする者、正誤の判断が出来ない者である。このうち、アーガマの正しい解釈に導くために推論が有効なのは前二者であるとされる。実際、バーヴィヴェーカは『中観心論』第5章で瑜伽行派の学説を批判する際、彼らを同じ仏の言葉を認めながらもそれに対して疑念や誤解を抱いている者たちと見なし、彼らに対してアーガマに従う推論を提示して批判している。

バーヴィヴェーカが『中観心論』を著述した目的は「偉大な覚りに心を定めた人が甘露の如き真実に悟入するため」(第1章第4偈)である。彼が同書で用いる推論はアーガマの誤った解釈を否定する否定的推論である。そして、それは覚りを目指しながらも真実を概念的に誤って理解する者たちを真実へ悟入させようとする彼の慈悲の表れに他ならず、ここに彼の推論が持つ教育的側面が見て取れよう。

本発表の目的は、バーヴィヴェーカが用いる推論の教育的側面に着目しながら、彼の思想体系において推論がいかなる役割を果たしているのかを明らかにすることである。

〈キーワード〉バーヴィヴェーカ、仏の言葉(アーガマ)、推論